

ご 挨 拶

独立行政法人国立女性教育会館女性アーカイブセンターは、男女共同参画社会の形成に顕著な業績を残した女性や女性教育・女性施策等に関する過去の記録の収集・整理・保存・提供に取り組むとともに、さまざまな分野で「チャレンジした女性たち」を紹介する企画展示をシリーズで開催しております。

前回の「化学と歩む」からは、パイオニアのみならず、現在活躍する方々も紹介する「チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」として、内容を更に発展させております。

シリーズ5回目となる本展「建築と歩む」では、日本の女性建築家および建築関連分野で活躍する専門家をご紹介します。平成23年賃金構造基本統計調査によると、建築に携わるうえで代表的な資格である一級建築士を有し、技術的な業務に従事している女性の比率は、全体の一割以下です。それと同時に、学校基本調査からは、土木建築工学を学ぶ女子学生が年々増加しており、理工学系の中では女性の数が多い分野であることも読み取れます。建築を学び、建築家の道を切り拓いた女性たちと、現在活躍している女性たち——それぞれの実践の軌跡から、男女共同参画社会の形成をより推進するためのヒントを見つけていただきたいと願っております。

本展に展示されている女性建築家のパイオニア6名（土浦信子・吉田文子・浜口ミホ・林雅子・中原暢子・飯島静江）の紹介パネル、「日本の女性建築家のパイオニアたち」「PODOKO=ポドコ」「PODOKOの女性たち」のパネルおよびポストカード、上映するビデオとパワーポイントは、国際女性建築家会議日本支部（UIFA JAPON）が、「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展」（UIFA JAPONと国際女性建築家アーカイブ（IAWA）共催）のために制作・収集したものの一部分であり、今回の展示のために提供していただいたものです。

本展開催にあたり、UIFA JAPONをはじめ、IAWA、その他多くの方々にご協力いただきました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

平成24年8月

独立行政法人国立女性教育会館
理 事 長 内 海 房 子

長谷川 逸子

1941年静岡県焼津市生まれ。

魅力的な人に出会うたびに、なりたいものが次々と変わる子供でしたが、高校2年生の時、隣席の友人から、父親が住宅の設計をしており、非常に楽しそうに仕事している様子を聞かされたことがきっかけで、建築の道を志しました。当時、大学の建築学科は工学部にしかなく、良妻賢母を掲げていた高校の進路担当者に入試に反対されて登校拒否を起こします。ほとんどの大学の願書提出の締切が過ぎた後、姉の紹介で関東学院大学工学部建築学科を知り、進学することができました。

大学2年生の実習授業で作った模型が、早稲田大学で開催された学生会議の展覧会に提出され、建築家・菊竹清訓の目に留まったことをきっかけに、京都国際会議場のコンペや浅川アパートの設計に参加しました。松井源吾の研究室で構造を専攻し、1964年に菊竹建築設計事務所に就職。男性スタッフばかりのアトリエにあって、5年間休みもなく建築の設計に没頭しました。陶芸や油絵やテニスやヨットなど、趣味をやめても仕事をすることを楽しみました。

大規模公共建築の設計を続けるうち、自分でデザインした家具が身近に感じられ、小さなスケールの空間を設計したいと考えるようになります。その頃建築雑誌でみた篠原一男の考えに惹かれて、東京工業大学で学びました。篠原の＜民家はきのこ＞（きのこの菌は着手した土地の気象や風土で独自のものとして育つ。きのこと民家も同じだ）という言葉が好きで、全国の民家を2年間見歩きました。都市建築を設計する時も、敷地の記憶を掘り起こしながら潜在力を引き出し、土地に根付いた建築をつくりたいと考えたのです。1971年から篠原一男研究室に勤務後、1980年に長谷川逸子・建築計画工房株式会社を設立しました。

1986年、神奈川県藤沢市の湘南台文化センター公開コンペで最優秀賞を受賞し、日本女性で初めて大型公共建築を手がけることになりました。

公共建築の提案にあたっては、地域の人々の生活や歴史を知るため、意見交換や具体的利用体験のワークショップを行い、市民参加の運営プログラムや市民の新しい繋がりの中での創造的生活の充実を目指しています。＜家をつくろう＞という子どもワークショップも多数開催しています。

一つの建築が立ち上がることで、まちに次々と賑わいが起こり、クリエイティブシティが生まれる事を目指しています。



練馬の住宅(1986年竣工)

後藤 眞理子

1948年東京都大田区生まれ。

東京都立三田高等学校、東京工業大学工学部建築学科を卒業。研究室に残って住宅設計に携わり、「谷川俊太郎さんの住宅」(群馬県吾妻郡)の設計監理に従事するなどしていましたが、3年後の1975年、仕事が一段落したのを機に、外国で設計の仕事をしたいと思い、フランスのパリへ。いくつかの設計事務所を訪れましたが、オイルショック後の世界的不景気のため思うように仕事先がみつからず、パリとロンドンを中心にヨーロッパの都市をめぐって、2ヶ月ほどで帰国しました。



知合いの仕事の手伝いや専門学校の講師などを経て、1976年に後藤眞理子デザインアトリエを設立。1978年に再びヨーロッパを訪れます。今度は生後間もない子供を連れて、家族でイタリアのローマへ。古いまち並みを大切にする姿勢や、伝統と新しい日常とが自然につながり共存している様子を目の当たりにし、さまざまな面において豊かな生活を実感することとなりました。

半年間の滞在を終えて東京に戻り、1982年に株式会社現代設計研究所を設立(1988年に株式会社後藤眞理子デザイン事務所に改称)。住宅設計を中心に仕事を再開しました。ローマと比較して、親しみ住み慣れた東京のまちが激しく変わって行く様子に落胆していましたが、近年は日本の住宅事情も変わり良くなったところもあると感じるようになりました。しかし課題は山積みであり、時間という観点を含めて本当の意味の豊かさをみなで考えていかなければならない、住まいづくりもまちづくりもこれからだと思い活動しています。

後藤眞理子さんからのメッセージ：女性の発言と役割 —まちへの視点も忘れずに—

現在、つくり手としての女性の割合は以前より増えた。また男性、なかでも若い世代の男性が使い手になる機会も増えている。しかし実際の生活の場で女性が使い手である機会はまだまだ多い。

女性、とくに若い世代の女性に対して期待したいことがある。ものを使う側からみた前向きの発言である。見えにくい問題に気づくのはむずかしい。しかしでき上がったものを手にして「おやっ」と思った時、なにが気になったのかをちょっと立ち止まって考える。専門家が、信頼あるメーカーがつくったのだからちゃんとできているのが当然とそのまま受け入れるのではなく、問題点に気づき指摘できる目を養ってもらいたい。

まちの環境やありかたにも目を向けるということ。まちを都市と言いかえてもいい。建築物がどのように建っているか、乱雑に見えないか、道路は、車で人が追いやられていないかなど、身近なことを含めて注意深く観察してほしい。まちづくりも広い意味でもものをつくることであり、まちづくりの専門家は建築と比べて比較にならないほど複雑で困難な問題に取り組んでいる。私たちはまちへの視点を忘れず、誰かがつくったのだから仕方ないとあきらめず、使い手としてどう受けとめるかを積極的に意識し、時には発言する。これは女性ならではの役割だとも思う。



Lei'OHANA:住居とレンタルスペースが共存するギャラリーハウス(2002年竣工)

阪東 美智子

1966年大阪府生まれ。

大阪教育大学附属天王寺高等学校在学中、高校2年生の夏から1年間、AFS(アメリカンフィールドサービス)の交換留学生として、カナダでホームステイを経験。留学中、同級生たちが、早くから具体的に将来の職業を決め、それに向けて着実に準備をしていることに刺激を受けました。

その後、神戸大学へ進学して学ぶうち、建築という分野は、設計だけではなく、修復や保全、構造、環境工学、都市計画など幅広い領域を含み、社会科学や人文科学的側面も持つことがわかってきました。社会的問題を含み社会に貢献できるテーマに取り組みたいという気持ちがあり、卒業論文のテーマは、当時社会問題化し始めていた「外国人労働者の居住問題」を選択。所属ゼミが開かれたばかりで、研究テーマだけでなく枠組みや方法などすべて自ら企画し実践しなければならず苦勞しましたが、同時に研究の面白さも実感しました。その中で、外国人労働者を支援するボランティア団体の調査で、大阪市西成区あいりん地区に通ったことから、日本人にも日雇い労働やホームレスの問題があることを知りました。これがホームレス問題を研究の柱の一つとするきっかけとなっています。



1990年に神戸大学工学部環境計画学科を卒業し、同大学大学院自然科学研究科環境科学専攻の修士課程に進みます。修了後、青年海外協力隊に参加。渡航先のザンビアでは大学の講師として建築製図を教える傍ら、スクウォッター地区の調査を学生と一緒に行いました。帰国後は大学院の博士課程に復学しますが、翌年、阪神淡路大震災で被災。大学が神戸にあったことから震災研究にも関わることになります。しかし、自分自身が被災者であり研究者であるという立場にあってその仕切りがうまくできず、研究から遠ざかったこともありました。

大学院在学中に結婚し、1998年に兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所に就職。さまざまな分野の研究者・実務者と連携し、時には障がいのある人々と一緒に実験を行いながら、障がいに関する知識や社会福祉の制度などを学びました。2001年に国立公衆衛生院に転職し、現職に至っています。

主な研究テーマは、社会的に配慮を必要とする人々の居住問題。これらの人々に対して適切な「住まい」を提供することは、健全な日常生活の営みや社会参加を行うことを可能にし、健康な暮らしを回復することにつながります。そのための方策を模索し提示することを目的とし、身体障がい児・者や高齢者の住宅や暮らしの改善に関する研究、被生活保護者やホームレスの人々の居住保障・支援に関する研究、DV・暴力被害女性の支援のための施設環境整備に関する研究などに取り組んでいます。